

シルヴィア・フェデリーチ（小田原琳・後藤あゆみ訳）
『キャリバンと魔女—資本主義に抗する女性の身体』
以文社、2017年

堀 芳枝（獨協大学外国語学部）

フェデリーチは1942年イタリアに生まれ、1968年にアメリカに渡り、ニューヨークを拠点として研究・教育のかたわら、社会運動にもかかわっている。1970年代には国際的ネットワーク「家事労働に賃金を」運動を、マリアローザ・ダッラ＝コスタや、セルマ・ジェイムズとともに創設。フェミニストとしての活動をベースに様々な活動に参加、近年ではオキュパイ・ウォール・ストリート運動を理論面でサポートしている。

フェデリーチが本書を書くきっかけとなったのは、1980年代前半にナイジェリアでIMF構造調整プログラムの受け入れが引き起こした社会的混乱であった。彼女はこれを新たな本源的蓄積と、共有財産および共同的な関係の最後の痕跡を破壊することをもくろむ社会的再生産の合理化をふくみ、それによって労働搾取が強化されると捉えた。そして、それは資本主義に普遍的な構造であると看破した。本書はそうした問題意識にもとづいて、ヨーロッパ中世にさかのぼり、本源的蓄積のための資本主義の移行期における資本と国家の剥奪と暴力、そして資本主義に適応するための労働者の身体の規律化を取り上げた。さらに、その過程において女性は労働者として男性よりも劣るものと位置づけられ、周辺化されただけでなく、女性がもっていた生殖の自己決定権をも、国家によって「魔女狩り」と称して正当化され剥奪された。すなわち、魔女狩りとは女性の身体に対する、国家がしかけた「戦争」であった。そして、国家や男性による生殖の管理、女性が担う労働であるということだけで無償化され、自然化され、本源的蓄積にいっそう貢献することになったと指摘している。

第1章「世界中で待ち望まれた衝撃—中世ヨーロッパ社会運動と政治危機」は、魔女狩りの前段階として、中世における農地と共有地コモンズの使用権をめぐる領主と農奴の闘争の話から始まっている。当時、農奴は土地の使用権を拡大する戦いを通して、共同体の結束力と共同性を高めていた。この共同体における労働は自給自足のためのものであったので、性別分業はさほど顕著ではなく、資本主義的農場に比べれば女性に対する差別も緩やかであった。

ところが、地代や賦役労働の金納化、封建関係がより契約的な原理に置き換えられるにつれ、共同体における女性の財産と権利は制限されていった。14世紀前半にはペストの流行によって人口が減少し、労働危機が起こり、農奴制が崩壊した。農民たちは領主から自由になり、女性もふくめてプロレタリアートは黄金時代を迎えた。しかし、女性が男性へ性愛の魅力を通して行使しうる力を恐れた教会は、神聖を性の忌避と結びつけて、性の規範を再編成し、女性の力を削ごうとしつづけてきた。また、プロレタリアートの台頭を恐れた国家は女性を強姦することや売春を合法化して女性を貶め、ミソジニーを煽り、プロレタリアートを分断し、封じ込めた。

第2章「労働の蓄積と女性の価値の切り下げ—「資本主義への移行」における「差異」の構築」は、ヨーロッパの資本蓄積が、プロレタリアート階級の自由と自立の源泉となった土地を私有化し、コモンズを崩壊させることから始まったことが指摘されている。これによって男性と女性、生産と再生産の分断—貨幣と交換の対象になる生産に価値があり、女性が中心的に役割を担う労働力の再生産は

無価値とされること一が起きた。

さらに、17世紀に人口危機と経済危機が深刻化すると、ヨーロッパの国家は人口管理に介入し、避妊や墮胎、嬰兒殺しを処罰するようになった。それは女性たちが持っていた再生産についての伝統的な知恵や技術の剥奪につながった。これが魔女狩りに繋がることになる。そして、非労働とみなされた女性の労働は、あらゆる賃金労働（売春も含む）から排除され、結果として、女性は結婚して良き主婦になり、労働力を再生産することが仕事であり、人生であると教えこまれていったのだ（女性の調教、規律化）。

第3章「偉大なるキャリバンー反抗する身体との闘い」では、ミシェル・フーコーが資本主義の発展の前提条件としてあげた「身体の規律化」を引用しながら、当時の代表的な哲学者ーデカルトとホブズーの論争の中に、身体を労働機械へと進化させる最初の概念化があり、労働過程の規則化や合理化・効率化が社会に受容されていったことが示されている。その一方で、それ以前の身体観ー身体は宇宙や自然と「共振」する超自然的な力を宿した身体で、星の動きや占いにもとづいて社会的ふるまいが決定されるーは否定された。そのプロセスで、本源的蓄積の妨げとなる、規律化されない、自己責任を負わない人間を許すような予言や占いなどの魔術をもった女性が、魔女として攻撃の対象となった。そして重要なのは、避妊や中絶の方法や知識も魔術として断罪されたことである。資本主義への移行期に魔女狩りが行われる思想的前提がここにつくられたのである。

第4章の「ヨーロッパの魔女狩り」は、土地の私有化、税の負担増大、社会生活のあらゆる場面で拡大する国家支配といった様々な変化とともに、農村共同体が崩壊しつつあったときに表れた。魔女とされた者たちの多くは、貧しい農民女性や高齢の女性であった。長年にわたって教会が繰り広げたミソジニーや、富裕層が抱く貧しい人々に対する恐怖が魔女狩りを可能にさせた。先にも述べた通り、中絶や避妊は悪魔的行為とされた。したがって、フェデリーチは、魔女狩りは女性の身体、労働、性的能力を国家の管理下におき、それらを経済資源に変容するための新たな家父長主義体制を創出する手段であったと考えた。魔女狩りは、本源的蓄積と資本主義への移行にとって 必要不可欠な事件であったのだ。

第5章は「植民地化とキリスト教化ー新世界のキャリバンと魔女」と題し、ヨーロッパ人がアメリカ大陸を植民する際にも、人食い、悪魔への子どもの供犠、様々な菓をつくりだす、男色を容認するインディアンたちの慣習を魔術とし、魔女狩りやインディアンを規律化させるための手段としてキリスト教化が正当化された。ここでも魔女狩りは共同体の紐帯を分断し、本源的蓄積に貢献するために戦略として実施された。しかもフェデリーチは、この新世界での魔女狩りが、16世紀後半にヨーロッパに逆輸入された結果、ヨーロッパの魔女狩りが大規模化し、より残酷化したと分析している。さらに、この魔女狩りは今日においても、資本主義がまだ浸透していない地域や領域に進出する際に、形を変えながら繰り返しおこなわれていると述べている。

本書の最大の貢献は、マルクスも見落とした本源的蓄積の過程における社会的再生産の問題を指摘したこと、フーコーの身体論をジェンダーの視点から読み解き、再構築した点にある。すなわち、性の身体が再生産と労働の蓄積の手段として機能するよう強いられることで、資本主義はより合理的に、より蓄積を実現することが可能となったのだ。だからこそ今日においてもなお、女性の価値は下げられ、貶められ、周辺化され続けるのだ。そして、本書で筆者の「プロレタリアート」の用語の使用については、曖昧さが見受けられ、大きな議論の余地はあるものの、本源的蓄積と女性や植民地、マイノリティへの暴力の関係性を明らかにし、それに対する抵抗が今日もなお世界の各地で繰り広げられていることを示してくれる。フェミニストにとって必読の書である。